母は、九十四歳で天国に召されました。体調が悪くなり、病院に運ばれたときには意識もはっきりしていましたが、母は主人に「祈ってほしい」と頼みました。私や弟も一緒に、母のために祈り、治療が始まりましたが、意識が戻ることはなく、主人の祈りの中、静かに眠るように、イエス様はあっという間に母を天国に引き上げてくださいました。心筋梗塞（しんきんこうそく）でした。母が大好きだったみことばは、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。」（1テサロニケ 5・16〜18）でした。本当に、このみことばの通り、最後まで主である神様にすべてをゆだねて、祈りながら人生を歩んでいた母でありました。

今思うと、二人の母の信仰と日々の祈りが、常に私をも神様の守りと導きの中に加えてくださっていたのではないでしょうか。主人が倒れたとき、あの苦しい中で「神様助けてください」と祈ることができたのも、神様の憐れみであり、感謝でいっぱいであります。

弟は、教会を出て、集会で共に祈るようになり、今では、私の兄夫婦も集うようになりました。神様は私たちの祈りや願いを必ず聞いてくださると、日々思わされています。

わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。
（エレミヤ 33・3）

喜屋武信子（きゃん のぶこ）
一九三七年 ペルー国リマ生まれ。四歳のとき沖縄へ帰国。コザ高校。和洋女子短期大学卒。
夫 昌信（しょうしん）。長女 周子（ちかこ）。
次女 さつき。長男 剛（たけし）。三女 倫子（りんこ）。

平安をいただく恵み

藤川 保子



夫の博さんと

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。
（エレミヤ 29・11〜13）

私は、一九五〇年十二月に熊本の、四方を山に囲まれた小さな町で生まれました。夫も同郷で、親が勧めるお見合いで、夫が二十六歳、私が二十四歳で結婚しました。

夫は政府系金融機関で仕事をしていましたので、定年で退職するまでの三十七年間に十一回の転勤があり、東京と地方を三〜四年ごとに行ったり来たりしていました。夫が二度目の東京転勤になり四年ほど経った頃、私たちは教会に導かれました。その当時

の私は、社宅の人間関係にギクシャクして、子育てにも悩んでいました。子供も三人与えられていて、経済的にも守られ安定しているのに、心は晴れずに満たされていませんでした。こんな自分が嫌で、変われるなら変わりたいと思っていました。教会婦人会のコーヒーアワーという伝道集会に社宅近くの友人に誘われ、初めて教会に行きました。

夫も同じ頃、忙しい本店での仕事に追われ、さまざまな心の飢え渇きがあり、何のために働き生きるのだろうと悶々としていたようでした。伝道集会後、二人で教会の礼拝に行くようになり、しばらくして受洗準備会にも参加するようになりました。夫は近くの書店で聖書を買い求め、乾いた砂地に水が染み込むように聖書を読み進めているようでした。半年後に夫に誘われるまま、一緒に滴礼を受けました。夫が三十九歳、私が三十七歳の時です。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。

（ヨハネ　15・16）

当時の私は、罪のことも十字架の意味も分かりませんでした。受洗後も受洗前となんら変わらない生活をしていました。三人の子供をより良く育てたい、子供たちのためにできるだけのことしてやりたいと、自分の思いと頑張りで子育てをしていました。イエス様に祈ることも、聞くこともしませんでした。夫に対しても、良き助け手どころか、むしろ夫の足を引っ張る者でした。私自身が、わがままで、自己中心で、夫を支配する者であることを分からずにいました。

何度目かの夫の転勤で、高校三年の長男を鹿児島に一人残して、私たちはまた東京に戻ってきました。三人の子供たちにも手がかからなくなったので、これ

からやっと自分のやりたいことができると張り切っていました。そんな矢先に、子供を授かっているのが分かりました。四十四歳になってからの出産、子育ての大変さを思い、またもう一度最初から子育てをしなければならないという、言いようのない不安で一杯でした。私は、環境の変化とつわりで家に閉じこもり、一日中横になっていることが多くなりました。その時は分からなかったのですが、なかばうつ状態でした。それまでは元気で、病気で寝込むことは一度もありませんでしたから、自分の気持と身体をどうしたら良いか分からずにいました。こういうことが自分自身に起こるとは思ってもみないことでした。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。

（1ペテロ　4・12〜13）

長男とは十八歳、長女とは十六歳、次女とは十三歳違いの次男の誕生で、思春期のまっただなかで、バラバラだった家族の心が一つにされたことは、主の憐れみでした。

集会に導かれたのは、二〇〇三年の松山喜びの集いに参加したのがきっかけです。その頃の我が家は、夫が四国の松山に単身赴任、長男と長女はそれぞれに学生として長崎とイギリスにいました。東京には、大学生の次女と小学生の次男と私が住み、家族が四カ所に別れて生活をしていました。私が夫の単身赴任先を訪ねて行く日に、ちょうど松山喜びの集いがあることを集会の姉妹に教えていただきました。その頃、夫は通っていた松山の教会に違和感があり、馴染めずにいたようです。それで、夫と一緒に喜びの集いに参加しました。初めての喜びの集いには知り合い

もなく、緊張のあまり良く覚えていないのですが、初対面の姉妹からベック兄とのグループでのお交わりを勧められ参加しました。ベック兄の話を聞くうちに、抱えていた肩の荷がスーッと軽くなり楽になったように感じました。二日目の礼拝後には、松山集会の兄弟とのお交わりも与えられ、夫は松山集会、その後岡山集会へと導かれ、喜ぶようになっていきました。

主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。（詩篇 145・18）

私は相変わらず、次男の子育てをしっかりしなければという思いに駆られて、疲れ果て、孤独感にさいなまれるようになっていました。これまでやってきたことに興味や自信がなくなり、生き甲斐としていたことや頑張ってきたことが色褪せ、虚しくなっていました。しかし、そとめには、そんな私の姿を見せず、惨めな自分を認めることもできませんでした。初めて、何のために生まれてきたのだろう、何を目的にして生きればいいのだろう、と思うようになっていました。イエス様は、私に魂の飢え渇きを与え、イエス様ご自身を求めるようにしてくださっていたのだと思います。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。（イザヤ 55・6）

渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。（黙示録 22・17）

二〇一三年四月に、夫に脳梗塞（のうこうそく）が与えられました。夫は六十歳で定年退職し、関連会社の金融機関で定年後も働いていました。現役の時と同じような働き方に、ある種の不安もありましたが、自己管理のできる人でしたから、多少無理があっても大丈夫だろうと、私はあまり気に留めることもありませんでした。三月上旬の夕方、会社で手のしびれがありペンを落としたことがありました。脳梗塞の前触れでした。その一ヶ月後の四月一日にいつものように出勤し、金庫を開けようとしたが、暗証番号が分からなくなったとのこと。掛かり付けのクリニックに行ったものの、症状が軽かったせいか、薬を処方され帰宅しました。夕方、夫の異変に気付き、救急車で病院に行きました。脳梗塞でした。最初の症状が現れてからかなりの時間が経っていることと、すでに出血しているので何の治療もできませんと言われました。神様に祈るしかありません、との医師の言葉に事の重大さがやっと分かりました。大小三カ所の脳梗塞による右半身麻痺と全失語との診断でした。「イエス様助けてください！夫の命だけは何とか助けてください！まだ高校生の次男がおります。私ひとりではとても無理です！」と繰り返し叫んでいました。こんなに必死に祈ったのは初めてでした。医師の長男も長崎から駆けつけて、混乱している私たちにこれからのことを説明し、「耐えられない試練はないこと、その試練からも逃れる道があること」を長男自身から聞けたことは慰めでした。

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント 10・13）

ベック兄にも祈っていただくためにお電話しました。「六十四歳！まだ若いね！これは罰ではないよ」とおっしゃいました。私は「罰ではないよ！」の意味が分からず、ずっと心に引っ掛かっていました。そして、それ

は後になってイエス様のご栄光が夫のことを通して現されることだと知りました。

「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（ヨハネ　9・2〜3）

救急車で運ばれる時から、集会のたくさんの兄弟姉妹が祈ってくださり、入院中もその後もずっと祈っていただいています。また、病院にも再々お見舞いに来てくださり、たくさんのみことばと共に祈りで夫も私たち家族も支えていただきました。神の家族の温かさ、素晴らしさを体験しました。夫の職場の方も再々訪ねてくださいました。夫は入院が長引いていたため、辞職したいとお伝えしても、「悪いようにはしませんから」と言ってくださり、その年度末まで席を置いてくださいました。発症したのが四月一日でしたから、新年度になって一日だけ、しかも数時間しか働いていないにもかかわらず、経済的にも大いに守られたこと、主の御業（みわざ）に心から感謝しました。

リハビリ病院に転院してからは、夫の持ち前の性格と、早く退院したいという願いもあり、手も足も言葉のリハビリも一生懸命にしていました。目を見張る回復ぶりでした。しかし本格的なリハビリが始まって五ヶ月あまりたった頃、また新たな試練が与えられました。「言葉のリハビリ中に、けいれんが起き、意識がなくなった」との主治医からの電話でした。ベッドの上の夫は、抗けいれん薬による副作用で一日中寝ている状態になっていました。主治医からは、五月に入院した時の状態に戻ってしまったので、手足の機能の回復と抗けいれん薬の調整に時間がかかるとのことでした。その後も再三けいれんの発作におそわれ、

退院予定が次々と延期され、リハビリする気力もなくなり、兄弟姉妹がお見舞いにきてくださっても表情が固くなっていました。その後、自宅に帰って何とか生活できるようにリハビリし、自宅療養となりました。退院して一年過ぎた頃、けいれんが十分間隔で起きたことがありました。一晩中病室に付き添っている時、私は恐怖と、今度ばかりは回復できないのではないかという不安、重い後遺症が残るのでは、との思いでいっぱいになっていました。少し前に与えられていた、「主に不可能なことがあろうか。」（創世記　18・14）のみことばにしがみつき叫び祈ることしかできませんでした。

その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。（詩篇　37・24）

主は夫の病を通して、私が夫に頼るのではなく、イエス様に頼るようにとしてくださいました。以前は、信仰さえも夫に依存していた私に、イエス様が光りを当ててくださり、頼るべきはわたしだよ、と教えてくださったことは大きな恵みでした。

私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してくださった。（詩篇　34・4）

この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から連れ出された。主があらしを静めると、波はないだ。波がないだので彼らは喜んだ。そして主は、彼らをその望む港に導かれた。（詩篇　107・28〜30）

夫の言葉のリハビリは現在も続いています。週に一回、四十五分間のリハビリの中で、必ず始めに「先週は何かありましたか?」と先生が夫に聞かれます。このようにして夫は、礼拝や学び会、喜びの集い、兄

10 人の証し

Unser HERR lebt

弟姉妹のこと、賛美のことなどを話す機会が与えられました。先生は、たどたどしい夫の話をいつも真剣に聞いてくださいます。夫がほぼ毎日、手のリハビリを兼ねて新約聖書を数節ずつと、日々の歌の歌詞を一曲ずつ書き写しているノートを持っていったことがあり、「良かったら歌っていただけませんか?」とリクエストされ、二人で賛美させていただいたことがありました。実習中の学生さんも二人同席していて、夫が歌っているのを見て驚かれたことがありました。主が夫をリハビリ病院に遣わされている、と感じることがあります。

病気が与えられ障害が残っても、礼拝や火曜日の学び会に喜んで参加することができ、兄弟たちの祈り会にも加えていただき、主にある交わりもさせていただけることは、本当に幸いです。

主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。（ミカ　6・8）

主とともに歩める恵みに感謝しながら、まだ救いにあずかっていない子供たち、親族、友人たちのことを、夫と共に、主が来られる日を待ち望みながら祈っていきたいと願っています。

藤川　保子（ふじかわ　やすこ）
一九五〇年十二月熊本県生まれ
熊本県立矢部高校卒業、関西女子短期大学保健科卒業
夫　藤川博（ひろし）、長男夫婦　敬太（けいた）、千秋（ちあき）、孫　愛生（あおい）、優花（ゆうか）、長女　尚子（なおこ）、次女夫婦　辰巳雄一（たつみゆういち）、知子（ともこ）、次男　匠（たくみ）

朝ごとに新しい主の恵み

藤川　尚子



中央が尚子さん、みなさんと

私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。（哀歌　3・22〜24）

私は一九七九年に鹿児島に生まれ、高校一年のときに弟が誕生するまで、兄、妹の三人兄妹で育ちました。父は仕事の関係で転勤が多く、引っ越した先々で、家族でよく山登りやキャンプ、海水浴、川遊びなどに行ったことが懐かしく思い出されます。

我が家に福音が届けられたのは、私が小学校低学年の頃です。両親は私たち兄妹を連れ、日曜日に教会に行くようになりました。

あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。（ヨハネ　8・32）

母の勧めもあり進学した高校は、入学と同時に新入生一人ひとりに聖書と賛美歌が配られ、毎朝授業が始まる前に「礼拝」とよばれる時間がありました。当番の先生方は、創立者が書いた本と聖書のみことばを引用しながら話されるのですが、特に校名の由来になっている前述のみことばは、よくテーマに取り上げられていたように思います。「自由」とは、世間一般でいうところの「自由奔放、勝手気まま」な自由ではない、ということは分かりましたが、私には「真理」と「自由」がとても難しく窮屈に感じました。

短大卒業後、私は教会の方を通して知ったイギリス南部にある語学学校へ留学しました。その学校は信仰をもつご夫婦が経営され、先生方も全員クリスチャンでした。十代から六十代までさまざまな年齢の生徒が、ヨーロッパ各地、中米、アジア、少数でしたが日本からも来ていて、その半数以上が信仰をもつ人たちでした。授業とは別に、全生徒が集まって賛美し、先生が自分の経験をもとに聖書について話す時間がありました。どれくらい内容を聞き取れ理解したか定かではないのですが、その時間は私にとってとても居心地がよく楽しいものでした。神様のことを分かちあうとき、何か温かいものが流れると感じたのはその頃です。

ハウスメイトや友人たちにも恵まれ、よく一緒に出かけました。誰かの家に集まると、必ず一人がギターを取り出してみんなで賛美が始まります。とても不思議でした。町を歩けばもちろん流行のポップスなども流れているのですが、私たちはたいてい賛美でした。自分の信仰をおくせず、心から喜んで賛美する友人たちの姿にいつしか、私もあのようになりたい、と思うようになっていきました。

イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」

（ヨハネ　7・37〜38）

ある時期、私は自分の中のみにくい嫉妬心に悩まされました。苦しく耐えられずステイ先を変えましたが、何の解決もありません。ちょうどその頃教会では、信仰のレベルに応じて聖書を学ぶ機会があり、私も初心者のためのバイブルクラスに参加していました。数回にわたる学びの最終回では、それぞれ目を閉じて心の中にあることすべて主に注ぎだすという時間が持たれました。私の心の奥にひそむ嫉妬の塊に光が当てられ、そのどうすることもできない状態を、とにかくすべて神様に吐き出しました。すると涙があふれ、同時にこころが軽く晴れやかになりました。初めて神様の赦しを体験的に知った瞬間でした。

そして二〇〇〇年春、イエス様とともに歩みたいと受洗の恵みにあずかりました。水からあがると喜びにあふれ、多くの友人たちが祝ってくれました。日本にいる両親もまたとても喜んでくれました。

イギリス滞在を通して、主が生きて働かれるお方であることを少しずつ体験的に知るようになりました。テキスタイルの勉強をするため、アート&デザインの大学の基礎科に籍を置いていた頃のことです。友達のいなかった私にとって寮食堂での食事は気が重く、次第に食堂から足が遠のき、寮の簡易キッチンで自炊するようになりました。大学のキャンパス内にはキッチンをシェアし自炊できる寮もありましたが、騒がしく清潔とはいいがたい寮もあると聞いていました。中途半端な時期ならなおさら、どんな寮に空きがあるか分からないし、寮を移るにしても事務手続きが面倒に感じていました。私はつぶやきました。「神様が本当におられるなら、寮を移るなんていとも簡単にできるはず。自分が何もしなくても寮が移れたらいいのになぁ」と。

10人の証し

Unser HERR lebt

数日後、一人の男性が私の部屋を訪ねてきました。階下に住み寮の世話役をしているとのこと。「君はしばらく食堂で食事をとっていないようだね。もしよかったら、自炊の寮に移れるよう手配しようか」。思ってもみない提案で、耳を疑いました。私は自炊の寮に移りたいことをだれにも話しておらず、この男性の存在も知りませんでした。あの日つぶやいた後も、自分で行動を起こさずにしてそんなこと起こるわけないか、と思っていたのです。不思議な展開に驚きつつ、これは神様だと確信しました。備えられた寮はとても静かな環境でした。目には見えないけれど、主は確かに生きていて、私の祈りにもならないつぶやきにも耳を傾けて聞いてくださるお方だということを知りました。

万軍の主は仰せられる。――わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。（マラキ　3・10）

当時は、自分で進路を決めたようでも、振り返ってみると、行く先々で豊かな主の導きがありました。新しい土地の教会を紹介してくれた友人、毎週教会へ車に乗せてくださったご兄姉。いつも礼拝や、同世代の集まる祈り会、交わりの中に置かれていたことは主の憐れみです。寮で知り合った友人へイディとは、後に一緒に家をシェアし、二年間生活をともにしました。自分の生活のごく一部分のみ神様に頼っていた私に比べ、彼女の信仰はまっすぐ主に向かうものでした。それゆえに、ときどき彼女の考えが窮屈に感じることもありましたが、彼女がいたからこそ守られたことは多かったと思います。

また、主は分かりやすくご自身のことを教えてくださいました。みことばを聞いても理解が遅く、主の囲いからすぐに離れようとする私を、主はいつも忍耐をもってともに歩んでくださいました。罪が何かさえも分からなかった私は、これくらいは大丈夫だろう

と自分勝手な判断ですぐに迷い出てしまいました。その中で、悔い改めて主に立ち返る大切さ、立ち返るとき必ず赦してくださること、また赦されてもなお自分は罪を繰り返すどうしようもない者だということ。それでも主は、ご自身のご愛を表してくださるお方だということを繰り返し学んでいきました。

イギリスから帰国して少したった頃、念願のアパレルの会社に就職しました。生地からデザインして服を作る会社で、履歴書を送ったところ、ちょうど欠員がでておりあっという間に決まりました。海外業務担当として意気揚々と入社したものの、求められている資質に対して自分の能力がまったく備わっておらず、すぐに行き詰りました。毎日無能な自分を見るにつけ、心が暗く沈みました。年二回の新作コレクションの発表と展示会を中心に、帰宅は遅く多忙な毎日を過ごしました。主により頼むことを知らず、自分の力でなんとかしなければともがき、自分の弱さを人に知られるのも恐れていました。そして心身ともに疲れ果て、一年もたたないうちに辞めたい思いが募っていきました。

わたしは潤いのない地に水を注ぎ、かわいた地に豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたのすえに、わたしの祝福をあなたの子孫に注ごう。（イザヤ　44・3）

そんな折、二〇〇七年、数年前より教会を離れて吉祥寺キリスト集会に集っていた母の誘いで、ドイツの集いに参加しました。まるで天国を思わせるような美しい場所で、ベック兄は「尚子、よく来たね」と温かく力強い握手で迎えてくださり、またたくさんの同年代の姉妹たちと出会いが備えられました。聖書のみことばや賛美が渇いた心に入ってきました。兄弟姉妹とのお交わりの素晴らしさを味わい、喜びと祝福に満たされた時でした。

また、主の不思議なご計画がありました。キャンプ

10人の証し

Unser HERR lebt

に参加された兄弟姉妹とは、ほとんど初対面だったのですが、何となしに参加者の部屋割り表を眺めていたとき、一人だけどこかで見たことのある名前が載(の)っていました。その方とは少し前より、仕事でやりとりがありました。ご挨拶した際、その兄弟の名刺入れから同僚の名刺が出てきた時、私は主を恐れました。実のところ、職場を辞める時期を主に示していただこうと願い、キャンプに参加したのですが、「私は、主のご計画によってこの職場に置かれているのだから、自分の思いで勝手に辞めることはできない」とはっきり思いました。そして、このドイツ喜びの集いの後、私も両親とともに吉祥寺キリスト集会へ集うようになりました。

私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。

（1コリント　2・12）

二〇一三年四月一日、私たち家族に大きな試練が与えられました。父が倒れ、救急車で病院に運ばれたのです。心臓でできた血栓が脳の血管に飛んで詰まった心原性脳梗塞でした。

右半身麻痺、言語障害、口から食事をとることもできなくなりました。さまざまな不安が家族の上に重くのしかかりました。私は自室にこもり泣きながら主に叫びました。「主よ！この苦しみは到底乗り越えられません！平穏な日々はどこへいったのでしょうか」

三日後、意識が戻った父の目は深く澄んだ海の色をしていました。そのとき私は、父はもう以前の父ではなく、主によって造り変えられたのだと確信しました。その後ほどなくしてリハビリが始まりました。マッサージをして血行を良くしたほうがいいと聞き、弟と妹が父の右手足をマッサージすると、久しぶりに笑顔が戻りました。ある晩、仕事帰りに父を見舞うと、ベッドの上にあぐらをかいて聖書を読む姿があり

ました。色々な機能を失ったものの、父の信仰は失われていないことを知り感謝しました。母は毎日のように病院へ通い、帰宅する前に、父と賛美し「日々の光」を読み、祈ることを続けました。初めは父を励ます目的でしたが、いつしかそれは、私たちが主から慰めと憐れみをいただく時間になっていました。

父は、脳のことばを司る部分にダメージを受けたため、看護師さんや家族との意思疎通ができない苦しみが与えられていました。文字が認識できなくなり、言葉を組み立てたり、発音するための口の動かし方が分からなくなりました。主治医からは、言葉のリハビリは年単位で続けることになるでしょうと言われました。

脳梗塞発症から七カ月後、最初のけいれんが起きました。けいれん発作は脳疾患の後遺症の一つで、その後も度々、発作に悩まされました。発作がおきると右半身が麻痺してしまうため、回復した機能が振り出しにもどります。これからどんどん回復してい

10人の証し

くと思っていた矢先だったため、父にも家族にも大きな落胆でした。けいれん予防薬は調整が難しく、服用していても度々発作は起きました。短いけいれんが十分ごとに数えられないほど何度も起き、けいれんを止める強い薬を点滴で入れたために頭がもうろうとしている父を見て、母はとても辛そうでした。けいれん発作は母にとって恐怖となりました。

イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」

（ヨハネ　11・40）

発作が起こされると、日常生活がふいに中断されてしまうような感覚になります。でも不思議なことに、退院する頃には体の動きや言葉は、けいれんが起きる前より一段階良い状態に回復すると感じることが多くなりました。血栓が詰まりダメージを受けた脳では、そ

の部分を補うように、別の回路が形成されていくそうです。あるとき、お見舞いに来てくださった集会の兄弟から、「けいれんが起きるのは、そのダメージを補う新しい回路が活発になっている証拠なのでは?」と言われ、合点がいきました。また、一時的に失われた機能やその回復の兆しをみると、人間の体の神秘を感じます。普段、体や脳の働きが狂いなく動かされ、さまざまな情報を処理していることは本当に奇跡です。主が一つひとつの器官に与えられた役割と働き、また他の器官との連携に神様のはかり知れない創造をおぼえます。

あれから四年、父は自分の思いを伝えられるまでに回復しました。礼拝や学び会、また兄弟方のお祈り会、喜びの集いを通して兄弟姉妹とのお交わりをいただいています。父が倒れた直後から、本当に多くの兄弟姉妹が私たち家族のために祈ってくださったことは、何よりも代えがたく心強いものです。主が備えてくださった、神の家族のサポートを心から感謝します。またその間、家族のさまざまな節目がありました。弟の大学入学、妹夫婦は主の御前で祝福の結婚へと導かれました。長年経過観察を続けていた私の未破裂脳動脈瘤の手術もありました。そしてすべて最善に運ばれました。

彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。
（1ペテロ　2・6）

前職は父が倒れた年の暮れに、主の導きにより退職しました。七年半の間、仕事を通してさまざまな訓練と、主からたくさんの学びをいただきました。苦しかったことも失敗も益とされ感謝に変えられました。現在は、海外研修プログラムに携わる仕事をしています。参加者のサポートが主な仕事内容ですが、私自身もまた、主によって特別に組まれた、ユニークなプログラムを受けていると日々感じます。私は恐れと不安に支配されてしまう性質があって、主に叫ばざるをえない毎日です。目の前の現状や自分自身を見つめ、暗闇の中におかれては、幾度となくみことばに立ち返るようにされます。自分のみにくさがあらわになり自分に絶望するとき、主の十字架のみわざとご愛を改めて味わいます。

私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。
（ヘブル　10・39）

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。
（ローマ　8・37）

主は真実なお方であり、いつも主の勝利は宣言されているのです。どんなことであっても主の定められたときに、必ず主が解決に導いてくださる。そして、主は、「自分でなんとか頑張りなさい」ではなく「これは神の戦いだから私に任せなさい」といつも語りかけてくださることは、本当にありがたく感謝です。そして、主の豊かな栄光の富から、今日一日に必要な知恵、判断、仕事に対する前向きな気持ち、体力や休息も与えてくださいます。主の組まれたプログラムは、よく考えられていて少しの狂いもなく、主が私にとって必要と判断されたことだけが、最善のタイミングで用意されるようです

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。
（マタイ　6・33）

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。
（1コリント　2・9）

高校のときはよく分からなかったみことば、「あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」（ヨハネ 8・32）が、今は心に響くようになりました。イエス様そして聖書のみことばが、私を束縛しているすべてのものから解放して主のみもとに引き寄せてくださると知り、心が温かくなります。

キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。（ガラテヤ 5・1）

イエス様と空中でお会いするそのときを楽しみに、賛美しつつ歩んでいきたいです。

どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。（ローマ 15・13）

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者 3・11）

藤川 尚子（ふじかわ なおこ）
一九七九年二月鹿児島生まれ
自由学園女子部高等科・学部、Norwich School of Art & Design 卒業
（株）ヨーガン・レール、（有）ヒロミ・ヨシイ、（株）ミナ
現在団体職員
両親、兄家族、妹夫婦、弟

主は与え、主は取られる

福島 直子



夫の光一さんと

私たちが、イエス様の許（もと）に導かれたのは、今から三十年前の一九八八年です。それは、結婚して十年目に与えられた子供の死を通してでした。子供の名は光宏といい、男の子でした。生後八か月で、それまで順調に育っていましたが、突然具合が悪くなり、病院に一週間ほど入院して、はっきりとした原因も分からないうちにあっという間に召されました。

その後、剖検（ぼうけん）して分かったのですが、先天性の心臓病でした。光宏の入院した大学病院の先生は、「この病気は症状が出ないと分からないから、お母さん、ご自分を責めるのはおやめなさい」と言ってくださいました。

私は、幼稚園と短大がミッション系でしたが、まったく聞く耳を持っていませんでした。短大でキリスト教概論という必修科目がありましたが、何を学んだかほとんど覚えていません。それよりも、幼稚園で二年間毎日歌っていた歌を今でもよく覚えています。

子供が与えられる五年ほど前に、いとこの娘さんの婚約

式に招待されて、主人と吉祥寺集会に行ったことがありました。その時は、教会というところは、何か問題があって悩んでいる人、かわいそうな人が来るところなんだと思っていました。まさか、そのかわいそうな人になって、吉祥寺集会に行くことになるなんて考えてもいませんでした。ただ、昔から心の中に、何かあったら教会に行こうという漠然とした思いはありました。

子供が召されてから心の中は空しさと絶望で圧(お)し潰(つぶ)されそうになり、このまま気が狂って何も分からなくなったら、どれだけ楽だろう、と考えたりもしました。家の中は真っ暗闇でした。人に会うのも嫌なので、ほとんど買い物にも出ませんでした。それで、いとこに電話をして、吉祥寺集会に連れて行ってほしいとお願いして、子供が召されて二か月後くらいから集いはじめました。集会に行っても、はじめはメッセージを聞いても何も分からず、ただ自分がみじめでかわいそうで、集会に泣きに行っていたように思います。お証(あかし)を聞いても、自分と比べて、自分を世界で一番不幸な人間と思っていました。

数か月後の一九八八年三月の軽井沢のバイブルキャンプに主人の車でいとこと一緒に行き、その夜、ベック兄の別荘でお交わりをしていただきました。泣きながら子供の話をする私の話をベック兄は聞いてくださり、何か言ってくださったのですが、よく覚えていません。

しかし、最後にベック兄と一緒に、「今まで神様の存在を認めず、自分勝手に歩んでいた罪をお赦しください」と悔い改めのお祈りをしたことはよく覚えています。それで、なんだかよく分かりませんが、次の日から、あんなに暗く沈んでいた心が晴れて、周りの景色がキラキラと輝いて見えるようになりました。

この世界を造った方がいらっしゃる。あの人も、この人も、この私も主が造られたのだと思うと嬉しくなりました。

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇　34・18）

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。（詩篇　51・17）

キャンプの二週間後、主人もベック兄とお交わりをしていただき、イエス様を信じる信仰へと導かれました。主人は、あなたが元気になるなら、と私が集会に行くことを許していましたが、私の変化を見て、私といとこの「運転手」としてキャンプに同行しました。そこでは、兄弟姉妹の中に入れられてお交わりをしていくうちに、何かを感じたのか、ベック兄とお交わりをしてみたいと思ったようです。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。（2コリント　7・10）

信仰を与えられ、主人と共に集会に集うようになって五年後の一九九三年、私に胃がんが見つかり、全摘と言われ、二人で落ち込みました。救われていないのではないかと思ったり、不安と恐怖で夜も眠れなくなりました。聖書には、からし種ほどの信仰があれば、山が動くと書いてありますから、私たちはまったくないに等しい信仰であることを思い知らされました。

手術の前日になって、やっと自分では何もできないと思うようになり、イエス様に、「すべてをお委ねしますからよ

10人の証し　Unser HERR lebt

われんでくださる神によるのです。（ローマ　9・16）

この試練を通して、自分を無にし、思いを捨てて、主にすべてをゆだねることを学ばされました。しかしながら、うなじのこわい者で、少し元気になるとまたむくむくと生まれながらの罪の性質が現れて、自分勝手に、祈りもせずに決めて動き出し、失敗を繰り返すどうしようもない自分を見せられています。

ベック兄が、キャンプや集会でお会いすると、いつも「まだ生きているの」と声をかけてくださいました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

（ガラテヤ　2・20）

ろしくお願いします」とお祈りすると、心が平安になり、ぐっすりと眠ることができ、手術に臨むことができました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

兄弟姉妹のお祈りとみことばに支えられ、平安の中に手術を受けることができました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

事（こと）は人間の願いや努力によるのではなく、あ

まだまだ自我をしっかりと握っている私を見抜かれた思いでした。

二〇二三年の年末、私の母が九十二歳で天に召されました。集会の国内外のキャンプや家庭集会にも何回か集い、ベック兄ともお交わりしていただきましたが、「天国なんかない、死んだらおしまいだよ」と言っていた母でしたが、召される二日前に「天国に行きたい」と願うようになり、主人と一緒に、三人でお祈りし天に召されました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

長い間、母の救いを祈ってきましたが、最後の最後で救われ、主の真実を体験させていただき、本当に感謝でした。

あなたがたが神のみこころを行なって、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。（ヘブル　10・36）

どうしようもない私たちのためにイエス様は十字架にかかってくださり、信じる者を義と認めてくださるイエス様に、心より感謝しています。どのような時にも、主からすべてを受け取って、主がいつも共にいてくださり、最善へと導いてくださることを確信し、祈りながら歩みたいと思っています。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。（ピリピ　3・20）

福島直子（ふくしま　なおこ）
一九四九年東京都生まれ。
池袋第一小学校、池袋中学校、都立文京高等学校、女子聖学院短大卒。
夫　光一（こういち）。

それがあなたに何のかかわりがありますか（ヨハネの福音書　21章22節）

丸山　明子



夫の良さんと

私は一九六一年、渋谷区に生まれました。父（鉄道車輌設計士）、母（私立女子高音楽教師）、兄（三歳上）、母方の祖母と叔母の六人家族でした。

私が八歳のときに母が病気で召され、十五歳のときに父が再婚しました。その一年後、後妻の人に兄と私は家を追われ、隣りに小さな家を建てた祖母と叔母に引き取られました。ほどなく、引っ越した父との別れのときがきました。

一九九一年に祖母が召され、集っていた無教会派の集会で葬儀をしていただいたことをきっかけに、私もその集会所に通うようになり、後に主人となる兄弟と出会い、一九九三年に結婚しました。その数年後の義父母の病い、介護と死は、つらくきびしい経験となりました。

二〇〇〇年、叔母の友人を介して知り合っていたキリスト集会の姉妹方と街で偶然にお会いしました。その後、青葉台家庭集会でベック兄弟と交わっていただき、救われました。絶望から希望の人生の始まりです。

二〇〇七年、父の家族から成年後見申立があり、父が認知症でほとんど視力を失って永福町の介護施設に入所していることが分かりました。この件を集会の弁護士さんの兄弟に相談した中で、「人としてお父さんに会わなくてよいのか」と言われ、ハッとしてイエス様からのことと思い、やっと父と会うことを決めました。

父との三十年振りの再会の日、梅雨の終わりの土砂降りの雨の中を、主人に伴われて施設に向かいました。車椅子に座っている父を見た私は、最初懐かしさと信じられないという驚きでか、わけが分からなくなり、思いがけず号泣しました。その声の大きさに、最初父はがっくりしたようでしたが、私の手の上に自分の掌を乗せて優しくトントンとなだめるような仕草をしました。そのとき、心の中に温かい何かが流れてきたことを今も覚えています。

父の再婚から始まり裁判へと発展した家族戦争では、自分を父親に捨てられた子どもで完全な被害者と位置付けていました。父との再会によって、それまで封印していた過去をたびたび思い出していました。あるとき、再婚した父が家を転売する恐れがあったので、空き家になった家屋の差押えの手続きをすることになり、どうしても家に入る必要がありました。当時、高校二年生だった私は父に電話をし、ピアノの練習と嘘を言って、鍵を開けておいてほしいと頼んだのです。その行為は、財産を最低限守るためにどうしても必要なことではありましたが、人間として、してはならないことでした。私はそのときから人知れぬ重荷を負って希望のない泥沼の人生を歩み始めたのかもしれません。

そんな私と出会って結婚することになった主人は、私の中にある影に心を痛め、父親との和解をずっと祈っていてくれたそうです。感謝です。

再会から数年間の父との交流の後、二〇一〇年一月、

父は天国に旅立ちました。キリスト集会で葬儀をしていただいたことは完全な奇跡と、ただ感謝の思いです。

見ずに信じる者は幸いです。（ヨハネ　20・29）

父との和解と昇天によって、私は希望の人生を歩み出していました。

二〇一三年の冬、主人の出生に関する事実（実子ではないかも知れないということ）が出てきました。主人は大変に驚き、衝撃を受けたと思います。心は主イエス様にあって平安に守られているようでしたが、体に変調をきたしたこともありました。私もショックを受けました。主人の複雑な胸の内を思うと、かける言葉もありません。しばらくして、父のことを通してイエス様がしてくださったことを覚え、最初に祈り始めた主人にイエス様が悪くなさるはずはないと思い至りました。さらに、「夫がイエス様の素晴らしさを味わい知ることができるよう、お導きください。私も体験したいです」と、今は祈っております。

イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。（ヘブル　13・8）

二〇一六年、永（なが）きにわたって楽器（チェロ）を教えてくださっていた尊敬してやまない先生が病いにかかり、大変に困難な闘病生活を送られ、まだ若くして召されました。私たちは祈り、ときどきお訪ねしていました。私は、このことが受け入れられず、苦しみました。

あるとき主人と飛行機に乗りました。天気と同じどんよりとした気持ちで離陸を待っていました。灰色の空を突き抜けると、太陽が雲の海を金色に輝かせていました。その美しい光景を眺めていたら、雨の日も太陽は同じように存在して、ただ見えないだけなんだと当り前のことを再発見しました。十七年間、楽器を通して先生との交わりを与えてくださったイエス様は、こんな者の祈りをも聞いていてくださったのだと思わされました。

先生が召されて後、主人と一緒に奥様をお訪ねしました。お話しの中で、奥様が私の母を知っていてくださったことが分かりました。

本当に主を畏（おそ）れます。主は生きておられます。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。（詩篇　139・23〜24）

丸山明子（まるやまあきこ）
東京都渋谷区出身。東京農業大学栄養学科卒業。
夫・良（りょう）
叔母・中澤多祈子（なかざわたきこ）

主を喜ぶことは、あなたがたの力

江藤　絵里



左から夫の尚広さん、絵里さん、ご両親の藤原信広さん、はるみさんと

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。

（詩篇　103・2～5）

私は両親との三人家族で育ちました。幼いころ、両親の仲は冷え切っていて、時には喧嘩となり、一緒に暮らしてはいても家庭は壊れかけていました。のちに状況は落ち着きましたが、父の立場は弱く、私も母を味方して父親を敬う気持ちがありませんでした。

一九八六年の夏、私が中学生のとき、母が極度のノイローゼ状態に陥り、一日中横になって遺書のようなものを書き綴るようになりました。看病していた父も困り果て、家の中は真っ暗でした。

ちょうどその時、母の小学校からの友人であるキリスト集会の姉妹を通して、聖書のみことばが届けられました。人間の言葉による励ましには無反応だった母が、みことばを噛み締めるように読み、確実に元気づけられていくのを見ました。主はその姉妹を遣わして、その後約半年ものあいだ、独りでは出かけられなかった母を集会に運び続けてくださり、母は心身ともに少しずつ回復していきました。

秋になり、母に勧められて私も集会に行き始めてみると、聖書のみことばが次々と心に入ってきました。このような経験は初めてでした。実は、母も私もある教会に通ってはいたのですが、この時までまったく霊の目が開かれていなかったのです。（とは言っても、幼いうちから聖書の神様を知ることができたのは恵みでした。ぼんやりとではありましたが、全能の父なる神様を信じていたことで、多くのことから守られてきたと思っています。）

あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。

（ゼパニヤ　3・17）

わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。・・・わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。

（イザヤ　43・1、4）

天に座しておられるだけの神様ではなく、私を愛し、ともにいて親しく語りかけてくださる主イエス様と出会うことができました。また、みことばに導かれ、自分が正しいと思って歩んできたことなどが罪であったこと、十字架でのイエス様の血潮は私の罪を贖うためであったことを知りました。イエス様が天に住まいを備えて近い将来私たちを迎えに来てくださるという、この世の何物にも代えることのできない驚くばかりの恵みに、平安と喜びで満たされていきました。

父もまもなく集会に集うようになり、その冬には

兄弟方との交わりの中で救いを受け取ることができました。数か月の間に家族三人そろって救いにあずかれたのは、主の大きなあわれみとしか言えません。

受洗前のベック兄とのお交わりの中で、毎朝聖書を読んで祈るように勧められてから、家族でその時間を持つようになりました。特に父は必ず守り続けました。母は父の食事を一番に用意するようになり、私も父を尊敬するように変えられました。こうして家族の中では父がかしらとなり、かつてはばらばらだった家族が、主の秩序に収まって、ひとつになりました。冷たくて暗かった我が家にパッと電気がついたかのように、主は、私たち家族を暗闇から光へと移してくださいました。

やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。（イザヤ　9・2）

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。（イザヤ　55・9）

学校生活などの日々の歩みを通して、主は祈りを聞いて最善のかたちで答えてくださること、主が「生きておられる」こと、を体験するようにしてくださいました。

その一方で、大人になるほど、自分中心の罪の性質に気づかされるようになりました。私の高ぶりの心は度々砕かれて、ついに自分はみにくい罪のかたまりでしかなく、まったく絶望的な存在であることを認めざるを得なくなりました。

主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。（詩篇　40・1〜2）

私は、罪によって滅ぶべき者であったのに、主が十字架の上で命を捨てて救ってくださったことは感謝してもしきれず、言葉に尽くせません。主は、この事実をただ受け取るだけでよいとおっしゃってくださるのです。なんという恵みでしょう。今でも自分のつたない歩みに悔い改めの毎日ですが、十字架を見上げることで感謝に変わり、自分自身から、そしてあらゆる思い煩いから解放していただくことができますから、本当に感謝です。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。（ガラテヤ　2・20）

主を喜ぶことは、あなたがたの力であるから。（ネヘミヤ　8・10　別訳）

その後、主は尚広兄との結婚に導いてくださいました。みことばや祈りの答えによって確信をいただくことができ、すべてをご存知である主に身を任せられるとはなんと幸いなことであるかと、結婚という大事な転機においてことさらに実感しました。みことばとともに成長した主人には、イエス様の堅い芯が一本通っているかのようで頼りになり、お互いの家族たちの祈りにも支えられて楽しく平安な家庭生活を与えていただいております。また、主にある兄弟姉妹の群れの中に置かれ、交わり、祈り、ご奉仕に加えていただくことを通して、いつも主を見上げるよう励ましを受け、主のなさることをともに体験し、主のご栄光をともに見せていただいております。何のいさおしもないこの者に、本当に身に余る主からの恵みです。

ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。（マタイ　18・20）

このようにして、主の栄光が現わされると、すべての者が共にこれを見る。主の口が語られたからだ。

（イザヤ　40・5）

主のみことばと兄弟姉妹の祈りは本当に力があります。その体験の中で最も印象的なのは、二〇一〇年の父の胃がんの手術の時です。ちょうど賛美のための集いが行なわれた週だったので、集っていた二百人近い兄弟姉妹の中でお祈りのお願いをしました。一度にこれほどのお祈りをいただき、みことばが届けられる機会はそう多くはないでしょう。まるで綿のカプセルの中に入って宙に浮いているかのような、圧倒的な平安に包まれた守りを感じ、感謝と賛美があふれてきました。家族でともに感謝して迎えた手術も最善に運ばれ、今でも父は守られて仕事を続けております。

主にある兄弟姉妹の中には一人の弱い人に寄り添う方もいらっしゃれば、群れ全体に気を配る方もいらっしゃいます。重い病の床にあって何も語れなくても、光をまとうように清らかな平安に包まれて主の証し人とされている兄弟姉妹にも出会ってきました。一人ひとりは違いますが、主にあっては一つのからだで、私たちはそのからだを通して働かれるかしらなる主イエス様ご自身のすばらしさを知るたび、ともに主をほめたたえる喜びにあずかります。

キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ　4・16）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

主のお約束である家族親族の救いは、私たち家族三人のあとはなかなか続きませんが、父方の祖父母は主に救われて天に召されたと確信しております。宮崎に住む祖父母や叔父たちのもとには、喜びの集いとそれ以外の時にもベック兄が足を運んでくださることがあり、それぞれふさわしい時に福音を聞く機会が与えられました。ベック兄とのお交わりの後、祖父は素直にしっかりと握手をしていましたが、祖母はどうもイエス様の話が気に入らなかったようでした。のちに祖父は突然の病ですっと天に引き上げられたかのように召され、祖母は何度か骨折をして体が弱められていきました。

祖母はいくつかの宗教とかかわりをもっていました。健康と幸せを願っていたのだと思います。しかし、聖書には「この方（イエス・キリスト）以外には、だれによっても救いはありません。」（使徒　4・12）と、はっきり書かれています。このままでは、祖母は祖父の憩う天国に行くことはできない！と私は主に背中を押されるように、主人とともに宮崎を訪ねました。これまでになく真剣にイエス様の話をする私に、祖母はしっかりと向き合って聞いてくれました。すぐに心を変える様子はありませんでしたが、ゆっくり話ができました。そのことを通して、かつて私の両親がうまくいっていなかった時に祖母が適切なことばをかけてくれたこと、両親がイエス様に出会って一つとされて洗礼を受けることを承諾してくれていたこと、などがわかりました。この祖母があって今の私たちがあることを改めて覚え、感謝と尊敬の思いで祖母の家を後にしました。主は確かに大きなご計画のうちに祖母に臨んでくださっていたのであり、このことは私にとって、祖母の救いの約束を感謝して祈る励ましとなりました。

しばらくの後、祖母は一時危篤となり、父が駆けつけて意識のない祖母のもとで祈る時が与えられました。集会の兄弟姉妹も祖母を訪ねてくださいました。まもなく祖母が回復して元気になったのを見て、父の兄弟たちはお祈りのおかげと言いました。それからは三か月毎に会いに来る父に、祖母の方からお祈りして、と頼むようになりました。しっかり者だけれど気の強かった

祖母が、素直になってよく「ありがとう」を言うように変わったと、父の兄弟も喜びました。のちに祖母が召された時の顔はうっすらと笑っているようで、それは天国でイエス様とお会いできたことを確信させるものでした。

神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。（黙示録　21・3〜4）

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

この証しの機会にこれまでの導きと恵みを思い起こし、感謝と賛美が心にあふれました。天国でイエス様にお会いしたらただ御前にひれ伏す気持ちですが、イエス様はきっと抱きしめてくださるのだろうと思っています。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。（1テサロニケ　4・16〜17）

ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。（黙示録　5・12）

江藤　絵里（えとう　えり）
一九七二年　東京都生まれ
杉並区立桃四小、立教女学院中・高、上智大学理工学部卒
夫　尚広（たかひろ）

信仰に歩む道は決して散歩道ではありません

孫　智華



中央が智華さん、みなさんと

それでモーセは民に言った。「恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」（出エジプト　14・13〜14）

初めて集会に来た時、私は集会に来て求めたのは子育て問題の解決、夫婦関係の修復などこの世の一般的な願い事でした。家は集会の近く、最初は火曜日だけ学び会に出るようになった。当時は、聖書も日本語もあまりよく分からなく、ベックさんのメッセージは子守り唄のように、聞くうちにすやすやに眠ってしまいました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませ

てあげます。

（マタイ　11・28）

その一眠りの平安と穏やかさは今でも覚えてる。集会通ううちに心はどんどん軽くなった。だんだん、寝るだけじゃあ満足できなくなった。わたしもベックさんが何を言っているか？知りたい。姉妹からもらったベックさんのテープを家で聞こうと思った。でも聞くうちにまた寝てしまった。そのとき心で叫びました。イエス様、私もベックさんが何を言ってるか知りたい。

その思いのまま、また火曜日の学び会へ行った。私は膝の上に日本語の聖書、北京語の聖書、ノート、準備万端、今日こそ私も姉妹たちのように聖書のあちこちの箇所を開いてみよう、間に合わなかったら、ノートでメモしよう。格好いい。嬉しくなっちゃった。いよいよベックさんのメッセージタイム、でも、やる気満々の私と違って、その日はベックさんはずっと旧約聖書の「ヨナ書」を読んでた。ヨナ書はピノキオみたいな物語、ベックさんが日本語で読んで、私が下で北京語の聖書を読めば、内容がよくわかります。確かにベックさんはヨナ書を読んでるけど、でも、その時、私は自分が読まれてるのを感じた。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（黙示録　3・20）

その日から、私の霊の目を開かれ、耳を開かれ、イエス様は私と共にいる。みことばとメッセージは聞こえるようになった。

人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。

（マタイ　4・4）

でも信仰の歩みにはみことばは聞けるだけでは、足りません、イエス様の十字架を通して悔い改めなきゃ歩むことはできません。その時、イエス様の十字架は何？悔い改めは何？私はわかりません。

ベックさんのメッセージを少しずつ聞けるようになったから、家でも自分で聖書を読むようになった。

聖書の初めは創世記ですから、創世記からを読み始めるのは普通です。別に何も考えてなかった。天地創造、アダムとエバ、ノアの箱舟、アブラハムなど、映画でもやってる話だね、だけを思った。

でもその後29章に入ったら、私と聖書、大変な険悪状況が始まった。創世記の29章からヤコブの結婚、ヤコブは二人の姉妹を妻にし、そのめちゃくちゃの家庭、その嫉妬と妬みの泥沼を文字で表せた。読むうちに涙がぼろぼろ、聖書に染みた。心の奥に開けたくない記憶のドアを開けられた。「やめて」もう許さないから、私は悪くない。何でレアの子どもたちの事、そんなに悪く書くの？悪いのは親よ。「誰が好きでこんなめちゃくちゃの家に生まれるの？親は選べるなら絶対こんな変な家に生まれたくないよ。私達をこんな家に生まれたのは私達のせいですか？違うよね、私達はこんなに悪くなったのは私達のせいですか、違うよ、それは親のせいよ、それはイエス様のせいよ、何で私達をこんな家に生まれさせたの？」、家は誰もいないのに一人で聖書と喧嘩。心の埋めた爆弾が一気に爆発、涙と叫びが抑えない、疲れはてた。

朦朧の中に、何か重い物を背負って前に歩む方が見えました、だれ？彼はその重い物を背負ったまま、振り向いて優しく私を見て、微笑んでくれた、「ちか、ありのまま来ていいよ。ありのまま来なさい。私はあなたとあなたの家族のした事は全部背負って行くよ」その一瞬、「ごめんなさい。イエス様、ごめんなさい。私が悪いです、私が悪かった。行かないで、死なないで、ごめんなさい、ごめんなさい」。もう一度目を開いた時は、イエス様はもう頭垂れて、十字架の上につけられてた。

信仰の創始者も完成者もイエス様

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。（伝道者　3・11）

イエス様に、見きわめることはできないって言われたのは本当によかったです。もう頑張らなくていい。

娘よ。あなたがしあわせになるために、身の落ち着く所を私が捜してあげなければならないのではないでしょうか。（ルツ　3・1）

去年、胃癌を診断され、東海大代々木病院で胃癌手術を受けました。入院中に「抗がん剤を飲まされるのか？」で怖かった。先生の白石兄が部屋に来た時、白石兄に「私は抗がん剤を飲むですか？」と聞きました。白石兄から「その事は我々が考える事、あなたが考える事ではないでしょ」。その時、その答えはただ、その通り、と思いました。後で、この交わりは私にどれほどの祝福が与えられるか、イエス様が明らかにしてくださる。

退院後、暫らく家で休養。家でじーっとするのは、苦手。自分と向き合うのはなかなか難しい。そもそも自分の取り扱い説明書がないから、どう取り扱いするのかわからない。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。（エレミヤ　17・9）

陰険な自分と、どううまく付き合いする？で悩みました。わからない事は、わかる方に聞いけばいいと思った。イエス様、教えて～。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。（ガラテヤ　2・20）

「ちかはもう二千年前に死んだよ。そんな事を考えるのは、あなたではないよ。私が考える。私がやる」

ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしは、エジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。（イザヤ　43・1～4）

イエス様に愛されるために造られた。イエス様、愛してくれて、ありがとう。

「そんな事考えるのは、あなたではない、私が考える、私がやる」って言われると、日々、私の思いより遙かに異なるイエス様の働きも体験するようになる。

一つの例を紹介させていただきます。

先日の町田の喜びの集いに参加させていただきました。家は会場まで四十五分の電車で着くのに、それでも宿泊を申込みました。宿泊を頼んだ後に、いろいろな姉妹に聞いたら、皆さんは近いため、ほとんど日帰

りです。その時、私の心が揺れ始めた。もしかして、「私が贅沢かしら?」「やっぱり、無駄使いよくない」、「日帰りもできる距離じゃないか」。あれこれ考えた時、一瞬「そんな事を考えるのはあなたではないでしょう、私が考える」の言葉が割り込んで来た。私はすぐに「はーいー」で考えるのをやめ、キャンセル料金をホームページで調べ始めた。でも、さすが、イエス様を恐れるから、キャンセル料金を見るだけにした。

つぎの日も、つぎの日も、キャンセル料金を繰り返して見る私がいる。とうとう、キャンセル料金が宿泊料金の半分になる日が来ました。その日は私の仕事のない日。家でゴロゴロしてたら、いきなり、社長の悲鳴なメールが入って来た。今日は予定よりも仕事の量が増え、今日中に完成しなければならない。手伝いを求めてた。

私は何も考えてない、着替えてすぐに会社へ行った。みんなで協力して、無事に仕事を仕上げた。その日、疲れたから、キャンセル料金の思いはどこかに消えた。次の日も仕事あるし、いつも通りに会社に向かう。電車に乗ると社長からメールが入って来た。

「ちかさん、昨日は急遽の要請に快く対応いただき感謝申し上げます。昨日勤務した時間は倍の時間としてご請求ください」

私は「え?」、初めての事ですから、いきなりこんなメールが来ると「どういう事?」でわからなくなった。暫くして、正気に戻り、社長の言う通りに計算してみると、驚きました。実際働いた時間の分は私の手元に残り、その倍の請求分はぴったり喜びの集いの私の申込み分通りです。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。
(1ペテロ　5・7)

主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。
(詩篇　37・5)

主を恐れる

すべての物事の上に、私の考えとイエス様との考えはまったく異なり、だから、すべての事の上にイエス様が「この事を考えるのはあなたではない、私が考える」と語り、私を落ち着かせる。

それを分かっても、イエス様に質問する私がいる。「全部イエス様が考えたら、私は何を考えればいいの?」

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。
(詩篇　103・1〜5)

そうか。私は賛美すればいい。感謝すればいい。ベックさんが言ってた。天国はみんな賛美で忙しい。これからもイエス様の愛と祝福、素直に受け取れるように、イエス様、よろしくお願いします。

どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。(ローマ　15・13)

孫(旧姓：林)智華。
一九六五年、台湾台北市生。
台北市私立復興幼稚園、小学校、中学校卒、旧台南家専(現台南科技応用大学)服装デザイン科卒。
中華航空公司(チャイナエアライン)勤務
一九九〇年来日。
家族：夫　孫正徳　長女　恵詩　長男　兆軒

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

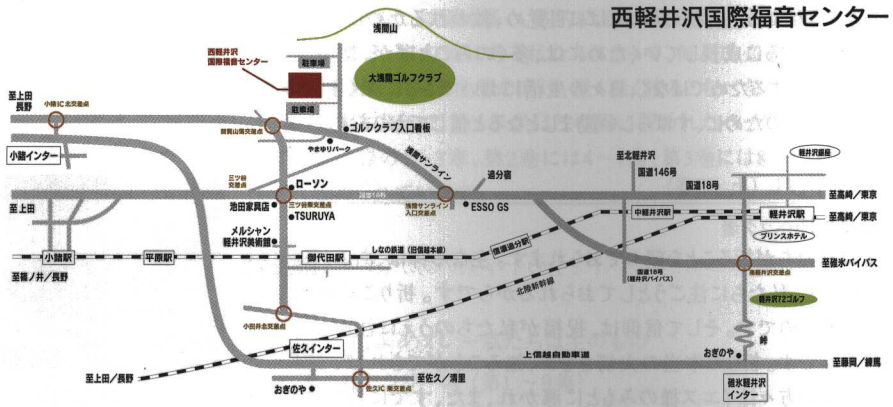
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会　10:30 / 18:30

火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話]　0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話]　0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より北陸新幹線にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ (上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

モーセの十戒　神の聖なる戒め



ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。

すぐに起こるはずのこと−ヨハネの黙示録 (第1〜4巻)



ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1〜3章、第2巻には4〜7章、第3巻には8〜15章、第4巻には16〜終章までが、それぞれ収められています。

光よあれ −私たちは主のもの



証しシリーズ (第1〜9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第48号

定価100円（税込み）2018年4月15日初版

編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

